

まいづる元気人 Vol.74

たくさんの人との出会いの中で『つながる』



NPO 法人まちづくりサポートクラブ 副代表理事

谷口 英子 さん

西市民プラザで地域子育て支援拠点『子育てひろば ひまわり』を運営しているNPO法人まちづくりサポートクラブ。同クラブの副代表理事、また、ひろばのスタッフとして持ち前の明るさと笑顔で日々心地の良い居場所づくりに奔走する。市の社会教育委員を10年以上務め、家に帰れば5人の子どもの母親。一人何役もこなす谷口さんの元気の源や思いを伺いました。

キャリアへの喪失感

出身は和歌山県、京都の大学に進学し、結婚を機に平成10年に舞鶴へ。高校で教員をしていたが第一子出産と同時に退職した。大学では地域福祉や障がいのある子の福祉を学んだ。その中で、子どもは前進と後退を繰り返しながら『せん状』に成長することを学んだため、わが子の子育ては、慣れない中でも子どものペースに合わせて待てる自分がいた。だからこそ、切羽詰まって子育てをしている周りの母親たちを見ると心配だった。

同時に、これでいいのかも感じていた。「出産して専業主婦になって、自分自身の人生がこのままでいいのかという不安に襲われたんです。せっかくなりたい仕事に就けたのに続けられなかった『キャリアへの喪失感』が今につながっているのかもしれない。」

根底にはわが子の幸せ

そんな時、市の総合計画策定の公募委員に応募し、福祉部会のワーキンググループに参加した。当時は『子育て支援』という考えが始めた頃で、現在の子育てひろばのような場所を求め

母親たちがサークル活動で居場所を作っていた。谷口さんもその一人だ。

ワーキンググループでは、自身が子育てやサークル活動で感じた課題や地域ぐるみで多世代がつながることの大切さを『当事者の声』として発信した。「本当の当事者は、困っている時に声をあげる気力がなくてニーズがないと思われてしまふ。だから、声をあげられる人になろうと思ったんです。これがきっかけとなり、現在副代表理事を務めるNPO法人まちづくりサポートクラブの立ち上げメンバーとなった。」

子育ての中では、子どもがメインになり親が自分自身を失う機会があまりにも多いことに思苦しさを感じた。赤ちゃん連れゆえにどこに行ってもお客さま扱いで、できることまで手助けされるのも嫌だった。自身が感じたこの違和感を次代に先送りしてはいけない。「いつも根底にあるのは、わが子に幸せになってほしいという思い。声をかけてもらったことをチャンスに変えて、微力ながらもこの地域が良くなるために活動して、少しでも環境が良くなったよとわが子に言いたいんです。」笑顔で当時を振り返る。

安心してつながれる場所

最近では、他人に迷惑をかけるないように育てられてきた世代が親になり、自分の子どもがトラブルを起ささないようにという防衛の心ばかりが働いて、親も子も気軽につながれる機会が少なくなっている。

『ひまわり』では、自分の子とその周りにいる子ども達の様子を薄く広く見守り『お互いさまの精神』で皆が安心してつながり、一緒に子育てができる仕組み作りを大切にしている。「社会福祉は『コミュニケーションの科学だと思っています。地域社会に入って人とどうつながっていくか。そのためには日常生活の中の登場人物を増やすことが有効で、ひまわりもそんな場でありたいと思っています。浴びるような人間関係の中で、人は豊かな経験ができるんです。」

太陽に向かってしっかりとまっすぐに伸び、大きな花を咲かせるひまわり。見る人に元気とパワーを与え笑顔にする姿と谷口さんの姿とが重なって見えた。



オドリコソウ (シソ科)

各地に分布し、道端や竹やぶなどに群生する多年草。茎は四角で高さ30~50センチ、節には長い毛がある。葉は対生し広卵型で先は尖り、縁にはあらい鋸歯がある。花は、春から夏にかけて葉腋に白色~淡紅色の唇形花を数個輪生する。花筒は基部で湾曲して立ち上がり、上唇はかぶと状で縁に毛がある。

名前の由来は、花の形を笠をかぶって踊る踊り子に例えたもの。以前、舞鶴では見かけなかったが、種が流されてきたのか由良川の堤防などで見られるようになった。

【協力】 瓜生勝朗/市文化財保護委員 (植物分野)



まごころ
花図鑑

vol.161

